

平成26年10月3日（金）

今日は、一流バット職人でイチロー選手などが絶大な信頼を寄せている
くぼたいそかず
久保田五十一さんの話をします。

久保田さんは数々の有名選手のバットを製作し、黄綬褒章も受章された方
であります。年齢が71歳を迎えられ、二人のお弟子さんも一人前に成長
されたため、引退を決意されるのを機会にテレビで特集番組が放映されまし
た。

その放送で心に残ったシーンがあります。それは、インタビューアが久保
田さんにバット製作で最も大切なことは何ですかと、質問した場面です。イ
ンタビューアは、高い技術力というような答えを期待していましたが久保田
さんがバット製作で最も大切にしていることに挙げたのは「心意気」だった
のです。

久保田さん曰く、「技術は時間があれば受け継ぐことができる。しかし
『心意気』は、時間がどれだけあっても受け継ぐことができない」と。
ゴルフプレーを例にとると、どれだけ多くの練習時間を費やしてもシング
ルプレーヤーにはなれない。「俺は必ずシングルプレーになってやる」とい
う「心意気」をもって練習に励んではじめて実現できるということです。

また、二人のお弟子さんには、「困難なお客さんが出てくることを祈ってい
る」ともおっしゃった。「困難なお客さんが出てくることを祈っている」とい
うことはどういうことかと尋ねると、ご自身の経験を紹介された。

久保田さんが最初に製作した野球選手は、矢沢という選手で現役引退後中
日の監督にも就任された選手でした。矢沢選手は、練習には久保田さんの作
ったバットを使用するのですが、試合では使用してもらえなかった。そこで
なぜ自分の製作したバットを試合で使用してもらえないのかと、本人に直接
質問した。しかし「良いバットです。注文は特にはありません」と、問題点を
指摘するような返事をもらうことが出来なかった。悔しくてより良いバット
を製作することに専念したが、それでも試合では使ってもらえなかった。
非常に悔しくて、また情けなくて、もう諦めようかとも考えていたある日、
いつものように試合を見学していた。ネクストバッターズサークルには久保
田さん製作のバットも持って行くのに、バッターボックスに行く時には、案
の定違うバットを持って行った。それを見て、矢沢選手の試合を見るのは今
回で終わりにしようと思い、そのかわり最終回までしっかり見ようと決心し
た。

すると、これまでバットだけしか見ていなかったため気づかなかったが、
矢沢選手がベンチからネクストサークルへ、さらにバッターボックスに入る

までの表情を見たとき、ハッとした。彼の表情が、「真剣な」という表現を超えて「鬼気迫る」ものだったからである。自分は矢沢選手のバットを製作するとき、技術の向上ばかりに気を配り、今日の前の矢沢選手が見せている鬼気迫る気持ちでは作ってはいないことに気づかされた。

それから久保田さんはバット作りを一から見直した。バットの材料となる木材の選定からである。自ら北海道まで足を運び原木を直接見て触って選定し、気持ちを込め、矢沢選手が喜んでくれるようにと願いながら製作した。このようにして作ったバットを持っていったところ、矢沢選手は試合で使ってくれたというのです。

次に製作したのが、落合選手のバットだった。まったく同じように製作した何本かのバットを納めたところ、落合選手はバットを触って使えないバットにマジックで「×」印を付けて返品した。返品された理由を聞いたところグリップの径が太いといわれた。

調べて見ようと採用されたバットのグリップと比べると0.2mmだけ太いことがわかった。たった0.2mm太いだけで返品されたことを久保田さんは非常に腹立たしく思った。しばらくして落合選手は久保田さんにどのようにしてバットを振りボールに当てるかを説明した。説明によると、バッターボックスで構えているときからボールに当たる瞬間までは、バットは緩く（軽く）握っていて、ボールに当たるその瞬間に、「足・腰・筋力」を駆使して持てる自分のすべての力をバットに伝える。従って、力をバットに伝えるポイントであるグリップは、非常に繊細であると共に大切である。こんなに太いグリップでは滑ってしまうのだと言った。

この時も、もう辞めようかとも思ったが、0.2mmにこだわる落合選手の心意気に見合うようなバット作りを目指そうと気持ちを切り替えたと言っておられた。

自分をここまで成長させてくれたのは、困難なお客さんがいてくれたお陰だ。困難にぶつかった時にこそ、自分が成長できるチャンスであると考えて努力した。その結果として今の私がある。だから弟子達にも、「困難なお客さんが出てくることを祈っている」とおっしゃった。

いつも私は「希望の中に幸福を見出す」と言っていますが、毎日を漫然と過ごすのではなく、いつも自分を成長させるために高い目標を持ち、何か困難にぶつかった場合には、困難こそ自分を高めてくれる好機ととらえて努力する。しっかり自分と向き合い、困難から逃げることなく真正面からぶつかって行く、その「心意気」が生きていく上で大切であるということを、今日は諸君に伝えたくてお話ししました。（学校長）